ユニバーサルデザインの視点による中学校音楽科の授業づくり

橋本　真海

1．はじめに

本研究は，音楽の授業における生徒の苦手や困難さに着目し，生徒が安心して学習参加できる授業づくりをめざしたものである。そのうえで，生徒理解の視点及び効果的な指導方法を明らかにすることを目的とした。

そこで、中学校音楽科の学習内容である２領域４分野全てに着手し，ユニバーサルデザインの視点を手がかりに授業実践を行った。A中学校では，器楽分野のギター譜の作成と鑑賞分野を，Ｂ中学校では歌唱分野，創作分野をそれぞれ扱い，成果と課題を考察した。

2．研究の背景

平成29年告示中学校学習指導要領では，表現の創意工夫や音楽に対する価値観を深めることで，知覚・感受の一体的な学びが期待されている。一方で，知覚・感受をすることや音楽表現をすることは，すべての生徒がすぐに，容易にできるものではない。なぜなら，生徒の音楽経験の有無や音楽に対する苦手や困難さ等，生徒のこれまでの音楽経験の積み上げは、少なからず音楽の授業での姿勢や成績に影響を与えているからである。

学習指導要領では，生徒の実態に応じた指導の配慮について示されている。たとえば，歌唱では変声期及び変声期前後の生徒に対して，無理のない声域や声量で歌うよう指導する。ここでは発声面だけではなく心理面にも十分配慮することが求められている。他にも，器楽や鑑賞では，一部の教材の選定に関して「生徒や学校，地域の実態などを考慮した上で」（文部科学省 2017, p. 111）内容を取り扱うように示されている。

これらの配慮は生徒の実態に応じた適切な支援の方法の一例である。実際には，生徒の実態が様々であるように教員が行う配慮，支援，工夫等も多様である。発達障害や認知特性によって生徒が感じる学びづらさや，授業を落ち着いて受けること，授業のペースに追いつくことに困難さを感じる生徒等，音楽科に限らずどの教科でも想定される学習上の課題もある。交流及び共同学習の場となることが多い音楽の授業では，特別支援教育の観点

からも生徒の学びに個人差があるという点への理解は重要である。

以上をふまえ，筆者は，音楽科における生徒の学びづらさと，教師が感じる一斉授業での細やかな指導の難しさの双方へのアプローチが，よりよい音楽の授業の実現への一助となると考えた。そして，そのような課題を解決するための手掛かりとして，ユニバーサルデザイン（以下，UD）の視点による教育に着目した。

UDとは「可能な限りすべての人が使用できる製品と環境の設計」（North Carolina State University Center for Universal Design 1997）を目指す建築デザインの概念である。この考えが教育にも影響を与えた。特に学習面については，学習者の苦手や困難さへのアプローチ方法として注目を集めている。学習におけるUDの考えは，生徒が学びづらさを感じる授業は決して珍しいものではないこと，そして教師は目の前の生徒が感じている学びづらさを察知し，適切な指導を行う必要があることを再認識させるものである。そして，授業づくりの具体的な方策が提案されている。

音楽の授業で児童生徒が感じる苦手意識や学びづらさに関する研究は，既に多岐にわたって課題とその解決策が検討されてきた。たとえば，阪井恵（2017）や増田謙太郎（2019）の文献では，音楽における学習者の多様なつまずきをUDの視点で捉え理解し，支援や工夫の方法を提示している。先行研究や現行の学習指導要領が示す指導上の配慮からは，音楽の授業に対する生徒の苦手や困難さへの授業者の理解が，適切な支援や工夫に繋がるということが確認できる。そこで，筆者はUDの視点を音楽科における苦手や困難さの課題解決への手掛かりとした。

３．研究の方法

（１）「UD」・「音楽の授業に対する苦手や困難さ」についての調査

本研究に関わる先行研究の調査として，「UD」と「音楽の授業に対する苦手や困難さ」をキーワードに先行研究・文献の収集及び整理を行った。「UD」に関しては，本研究では特に「授業のユニバーサルデザイン（授業UD）」と「Universal Design for Learning（UDL）」に絞り，学習におけるUDの理論的枠組みの整理をした。

「音楽の授業に対する苦手や困難さ」は，音楽科におけるUDの先行研究及び文献を収集し，先行事例やUDの視点での音楽科についてまとめた。

（2）UDの視点による音楽の授業の構想及び実践

先行研究に基づき整理した理論的枠組みと，実習協力校の実態把握を基に，UDの視点による音楽の授業を構想した。本研究では，令和５年度にA中学校，令和６年度にB中学校でUDの視点による研究実践を行った。

（3）実践した授業の分析・考察

授業実践で使用したワークシートを，各授業の学習の目的に沿って生徒がどのような記述をしているか分析を行った。さらに，UDの視点による支援・工夫がどのように反映されていたか検討と考察をした。

令和６年度の実践では授業前後で生徒にアンケート調査を実施した。本研究の「安心して学習参加する」ことを，生徒の音楽活動への自信の変容から検討することとした。また，授業内で使用した支援・工夫の把握，活動選択できることが自分自身にとってよかったかどうかを質問項目に入れ，生徒から支援・工夫に対する評価を行ってもらった。

４．「UD」・「音楽の授業に対する苦手や困難さ」について

まず，授業UD・UDLについて説明する。授業UDとは，教育現場から発信され，浸透したキーワードである。後に日本授業UD学会[1]によって「特別な支援が必要な子を含めて，通常学級の全員の子が，楽しく学び合い『わかる・できる・探究する』ことを目指す授業デザイン」（日本授業UD学会 2021）と定義づけられた。多くの先行研究・文献[2]で重要視されている授業UDにおける授業構想のポイントは，「焦点化」「視覚化」「共有化」である。

続いて，UDLについてである。UDLはアメリカの研究団体Center for Applied Special Technology（CAST）によって提唱された概念である。UDLの理解に必要なポイントは，①カリキュラムの障害，②UDLの三原則，③ゴールの明確化，④学習者にとっての障壁の想定とオプションの提供，である（桂ら 2020, pp. 50-51）。①のカリキュラムとは，「学習のゴール（目標）」「方法」「教材・教具」「評価」（CAST 2011, p. 9）のことである。UDLでは，学習における障害は，学習者ではなくカリキュラムにあると捉える。CASTでは，学

---

[1] 日本授業UD学会は2016年に設立された一般社団法人である。

[2] たとえば，阿部利彦・赤坂真二・川上康則・松久眞実（2019）pp.10-11や佐藤隆也（2018）では，授業UDのポイントとして上記３点をとりあげている。

また，桂聖（2011）では国語科の授業のユニバーサルデザインのポイントとして，第１章～第５章にかけて詳述されている。

習者を授業に適応させていくのではなく，授業が学習者に適応できるような柔軟なカリキュラムとなる必要があるのではないかと考えられている。柔軟なカリキュラムをつくるための指針として②の「UDLの三原則」がある。これを基に，授業者は，全ての学習者が学習のゴールに向かって学ぶことができるカリキュラムをつくることがのぞまれる。そのために，③のゴールの明確化，④の学習者の学びづらさの想定，障壁を取り除くことのできる代替方法（オプション）の提示が重要となる。学習者が自分にとって最適な学び方を選択することで，学びづらさの解消と主体的な学習参加を目指す。

「音楽の授業に対する苦手や困難さ」については，普段，音楽の授業で扱われている教材・教具等が児童生徒にどのように有効に働くかを，UDの視点で検討した。たとえば，読譜力が十分ではない児童生徒に楽譜に階名を書く支援の方法がある。音階や楽譜に馴染みのない児童生徒にとって，読譜や楽器の演奏は記憶に頼る部分が多くなる。この支援は，記憶ばかりに頼らないようにし，児童生徒の負担を減らすことができる。

同様の視点でみると，小学校音楽科には読譜に関する工夫がある。教育芸術社の小学校第１学年の教科書『小学生のおんがく１』では，五線譜を用いず階名付きの黒玉と休符替わりの「・」のみで記譜された楽譜が挿入されている。

また，令和２年以降，GIGAスクール構想の下１人１台端末の普及により，タブレット端末やその他コンピューターを含むICTの活用方法は幅が広がっている。音楽科における作品の記録もその一例である。たとえば，Chrome Music Labが提供する「Song Maker」，教育芸術社が提供する「カトカトーン」という音楽作成ツールがある。これらは，音階ごとに色分けされたバーを組み合わせ，五線譜を使用せずに音楽づくりができる。作品を記録する機能も備わっており，「カトカトーン」については，音源や五線譜の楽譜を自動作成し記録することが可能となっている。これらは，UDの視点を出発点に普及されたものではないが，ICTの活用が，生徒への支援や音楽科のUDにおいて必要となると筆者は感じている。

５．実習協力校での実践と考察

（１）本研究における理論的枠組み

音楽の授業に苦手や困難さを感じる児童生徒の実態については，どの学校でも授業者が直面する可能性がある。本研究では，生徒の実態とその背景を把握し，適切な支援を考案することを試みた。

そこで，上述した授業UD・UDLをふまえて，本研究における理論的枠組みを以下のと

おりに設定した。また，本研究では音楽科の2領域４分野を扱い研究を進めた。

①生徒の苦手や困難さ，つまずきの理解と想定する

②ゴールを明確化する

③柔軟で適切な学びを提供する

（２）A中学校での実践

１）器楽のギター譜の作成

A中学校の音楽科では，筆者が実習を開始した令和５年度６月の時期に「A表現」器楽の授業でギターが扱われていた。授業観察及び補助をするなかで，読譜につまずきを持っている生徒の様子が一定数見受けられた。

授業で使用していたのはダイアグラムという楽譜である。ダイアグラムは，大半の人にとってはわかりやすく作られている。一方で，罫線の羅列で構成されている点が，生徒によっては位置関係の認識しづらさを感じさせている（図１）。また，記号の理解，弦を何指で押さえるかを識別，記憶するといった，情報処理の複雑さがあると筆者は感じた。そこで，授業で使用しているダイアグラムの視覚情報をより整理したギター譜の作成を行った。

ギター譜の作成に当たっては，荒木美香・阪井恵（2017）を参考にし筆者が作成した（図２）。まず，罫線を識別しやすくした。また，弦を押さえる指をダイアグラムに示すことで，生徒にとって必要な情報も追加した。続いて，筆者が作成したダイアグラムでは弾かない弦を点線にして記号の数を減らし，かつ識別がしやすいように試みた。

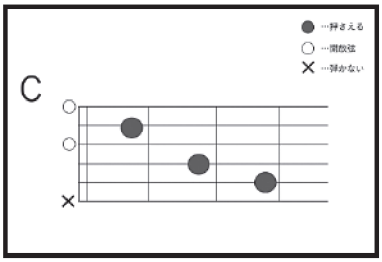

図１．従来のダイアグラム

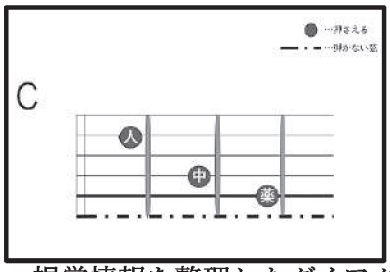

図２．視覚情報を整理したダイアグラム

２）鑑賞の授業実践と考察

A中学校の第１学年を対象に鑑賞の授業を行った。題材は日本の民謡で，全２時間構成である。本題材のUDのポイントと実践後の結果，考察は以下のとおりである。

本題材では，教材として２曲の民謡を扱った。そのうちの１曲を郷土の音楽とし，実習協力校の在籍地から生まれた郷土の音楽の収集と，教材の選定を行った。

本題材の教材に対する生徒の反応は好感触であった。授業の最後に「もう１度聴きたい」と要望が出たり，口ずさみながら鑑賞したりと，生徒が郷土の音楽に親しむ姿がみられた。生徒にとって馴染みのない日本民謡を題材としたが，教材の選定にこだわり，生徒の興味，関心，学習意欲を高める教材と出会わせることができた。

続いて，ワークシートでは「書くこと」に苦手意識のある生徒を視野に入れ，記述欄に工夫をした。１時間目の授業では，民謡の「節回し」「コブシ」を知覚することを目的とした活動を行った。その際に，自分の捉えた歌い方を記述する項目を設けた。記述にあたっては文字に限定せず，線で書き表してもよいこととした。

授業後，生徒の記述内容を確認すると，言葉，線のどちらか一方やその両方を用いて自分の聞き取った歌の特徴を表現していた。線のみで記述した生徒は，全員波線を書いていた。授業中にそれは何を表しているのか授業者が直接問うと，「声の揺れ」「声の震え」と回答し，口頭で言語化ができていた。授業内の生徒観察と併せて，生徒が歌い方に焦点を当てて知覚ができていたことがわかる。歌声は本来目には見えないものであり，その特徴の言語化を難しいと思う生徒は少なくない。特徴はわかっているが言葉で表現することが難しいと感じている生徒への支援としても，適切であったと考える。

（３）B中学校での実践

１）歌唱の授業実践

B中学校の第１学年を対象に歌唱の授業を行った。題材は《浜辺の歌》で全３時間構成である。本題材のUDのポイントは以下の２点である。

第一に，本題材では全３時間を通しての「題材のゴール」と「題材のゴールに向けた各時間のゴール」を設定した。

第二に，つまずきの想定とオプションの提供を行った。本題材では，曲の音取りの活動（第１次）と音楽の構造を理解する活動（第２次）でオプションを提供した。オプションの考案には，島根大学教育学部附属義務教育学校が独自に開発・実施している「Shimafuシート」を活用した。[3] 本稿では，その内容を整理して示す。

---

[3] 「Shimafuシート」は，学習指導計画を「学習活動」「全ての生徒の到達目標」「学びの多様性（生徒の困難さ・つまずき・願い）」「活動の支援・工夫」の４項目に分けられた学習指導計画表である。

第１次の音取りの活動におけるオプションの提供では，生徒のつまずきを項目Ａ～Ｄに分類し，各項目に対する活動の支援・工夫を用意した（表１）。

表１．音取りの活動で予想されるつまずきと支援

<table>
<tr><th colspan="2">生徒の困難さ・つまずき・願い</th><th colspan="2">活動の支援・工夫</th></tr>
<tr><td>A</td><td>一度聴いただけでは覚えられない。</td><td rowspan="3">オプション①：
タブレットで音源を何回も聴くことができる。</td><td></td></tr>
<tr><td>B</td><td>自分のペースで練習したい。</td><td rowspan="2">オプション②：
個人で練習する。</td></tr>
<tr><td>C</td><td>一人でもできる。</td></tr>
<tr><td>D</td><td>一人では練習が出来ない。</td><td colspan="2">オプション③：先生と一緒に練習する</td></tr>
</table>

タブレットで音源を聴いて練習するオプションについては，クロームブックを活用し，生徒が自分のタイミングで繰り返し聴くことができるよう，楽譜付き音源を提供した。

続いて，第２次では，生徒が曲の強弱の変化，旋律や伴奏の音の動きにどのような工夫があるか考え，理解することを目的とした。そこで，読譜力が十分ではない生徒，曲を聴くだけでは音楽の特徴を捉えることが難しいと感じる生徒へオプションを提供した（表２）。

表２．音楽の構造を理解する活動で予想されるつまずきと支援

<table>
<tr><th colspan="2">生徒の困難さ・つまずき・願い</th><th>活動の支援・工夫</th></tr>
<tr><td rowspan="2">A</td><td rowspan="2">音楽を聴いたり，
楽譜を見ただけではわからない。</td><td>オプション①：楽譜や音源を使う</td></tr>
<tr><td>オプション②：映像付きの音楽を用意する。</td></tr>
<tr><td>B</td><td>一人では活動に取り組めない。</td><td>オプション③：旋律・伴奏を可視化する活動を用意する。</td></tr>
</table>

２）創作の授業実践

B中学校の第２学年を対象に創作の授業を行った。教材は教育芸術社『中学生の音楽 上』pp.36-37掲載の「My Melody」，全１時間構成である。

本題材のUDのポイントとして，まずゴールの明確化を行った。本題材では，言葉の抑揚にあった旋律をつくることを目的とした。

続いて，つまずきの想定とオプションの提供を行った。今回の授業では本時のメインの活動となる，創作活動でオプションを用意した。詳細は以下のとおりである。

オプション①；視覚情報の提示

ワークシートの記入方法がわからない，旋律創作の活動の見通しが持ちにくい生徒への支援である。電子黒板にスライドを提示し，生徒が活動の手立てにできるよう工夫をした。

オプション②：タブレットの使用

クロームブックに，小節数，拍子，テンポやリズムが設定されたSong MakerのURLを授業者が配布した。楽譜に馴染みのない生徒へ負担がないように配慮したオプションである。

オプション③：言葉の抑揚や音の高低の可視化をする活動の提案

言葉の抑揚や音の高低を可視化する活動である。ワークシートに，言葉の抑揚を生徒が可視化できるようにするための記入欄を設けた。

（4）実践した授業の分析

1）歌唱及び創作のアンケート調査について

歌唱及び創作の授業では，毎時間，Googleフォームを使用して生徒に事前・事後アンケートを実施した。アンケートは，以下の内容を筆者が確認することを目的とした。

まず，生徒の歌唱（旋律創作）に対する自信の変容についてである。歌唱では《浜辺の歌》の音取りと，音楽の構造を理解することに対する自信の変容を見た。また，創作では，旋律創作に対する生徒の自信がどのように変化していったか，４件法を用いて確認した。

いずれも，授業前後で生徒の自信は向上の傾向があった。また，各結果を有意水準５％未満とし，対応のあるｔ検定，一要因分散分析を行ったところ，全てに有意差がみられた。

続いて，生徒が授業内に使用したオプションを把握した。歌唱では，音取り，音楽の構造を理解する活動の双方において，多くの生徒がオプションを使用していたことがわかった。一方，創作の授業では，オプションを使用した生徒は半数程度であることがわかった。

最後に，オプションに対する評価をアンケートで調査した。歌唱，創作ともに，活動の方法を選択できることが「自分にとってよかった」と回答した生徒が８割を超えていた。

2）実践した授業の考察

アンケート結果，ワークシートの記述内容等をふまえて，授業実践を考察する。まず，生徒の自信に変化があったという点は，授業前後で生徒が自分の取り組みを振り返ることができていたと考えられる。そこには，ゴールの設定と提示をしたことで，生徒にとって授業内容や活動の目的が明確となり，目標に沿った活動できたのではないかと推察する。

続いて，UD化した授業についての考察をする。まず，生徒のつまずきへの支援として用意したオプションは，生徒から肯定的な評価を得られた。これは，筆者が生徒のつまずきを正確に想定し，オプションが生徒にとって適しているものだったと考えられる。

歌唱の授業内の生徒観察では，生徒が徐々に積極的にオプションを使うようになってい

たことが確認できている。オプションの使い方に慣れていくことによって，生徒が自分自身に合っている学び方を模索，選択することができるようになったといえる。

また，創作分野の授業では，オプションを用意していたが，授業内で使用する生徒が少なかった。しかし，活動の方法が選べることについて「よかった」と感じた生徒は過半数を超えていた。その理由として，①対象学年の生徒にはオプションは必要なかった，②各オプションに慣れる時間が必要であった，③筆者が用意したオプション以外に生徒に適した支援があった，ということが考えられる。今回は友達に頼りながら創作活動を進めた生徒が多かった。オプションを使用するよりも，近くの友達に頼ることができるというのは，対象学年の生徒たちが日頃から良好なコミュニケーションをとっているからこそである。生徒の姿から，教材・教具の支援の他，人的環境を良くしていくことも生徒の学びづらさの解消に必要であると気づかされた。

6．本研究の意義と課題

本研究では，中学校音楽科を対象としUDの視点による授業づくりを行った。音楽科における授業UDやUDLの実践は先行研究が少なく，特に中学校音楽科の研究は限られていた。そのような中で，中学校を対象に音楽科のUDをテーマに実践研究を行ったことが，まず本研究の大きな意義であると考える。その上で本研究の成果を改めて３点にまとめる。

第一に，音楽の授業をUD化することの有効性についてである。UDの視点による理論的枠組みは，授業づくりのポイントとしてそのまま反映させることができる。題材によって，教材・教具の工夫や学習のゴールの設定に差異はあれど，明確な視点をもつことで，生徒が学びづらさを感じない授業づくりができる可能性を示すことができた。これは，本研究で音楽科の全領域に着手し，領域に関係なくUDの視点による授業づくりの効果を得ることができたことが裏付けとなる。

第二に，音楽科のUDを理解するにあたって，視覚情報を整理したギター譜の作成を行った。筆者が作成したギター譜は，ダイアグラムをベースに少し手を加えるだけのものであり，ダイアグラム自体はわかりやすくできていた。UDの視点で何らかの手立てを施すことは，既存の物の良さを活かしながら，ほんの少しでも気を利かせ，工夫をすれば，予想以上の効果が得られることがわかった。

以上のことから，UDの視点で教材・教具を捉えることで，今の音楽の授業で使用されているものがどのようなつまずきを持つ児童生徒に対して効果を発揮するか，検討ができた。

このことは，生徒の実態の応じた適切な支援を行ううえで重要な視点であると考える。

第三に，本研究は，授業UDのポイントである「視覚化」によって得られた効果が大きかった。ワークシートのレイアウトを整えること，指示をスライドに示すこと等，授業づくりの「視覚化」によって学習の展開がスムーズになり，生徒が混乱せず授業に臨めていた。

さらに，鑑賞で民謡の節回し等を線で表すことや，歌唱で「浜辺の歌」の音楽の構造を可視化すること等，音楽そのものを「視覚化」する工夫を施すことができた。

アンケート調査から，それらの工夫を「わかりやすかった」「よいと思った」と感じる生徒が多いことがわかり，音楽の授業における視覚情報の重要性も明らかとなった。

また，研究を進めていくなかで課題点も見つかった。

第一に，筆者の授業経験の少なさである。今回の授業実践では，筆者の授業者としてのスキルの未熟さからデータの収集に不足があった。授業者としての力がもっとあれば，本研究とは異なる結果と課題が明らかとなったかもしれない。

第二に，学習内容の定着と活用ができていたか，という点である。本研究では，生徒の学習参加を促す一助としてUDの視点で音楽の授業づくりを検討した。２年間の研究を通して，実践研究では生徒の学習参加を促すことができたと考えている。

一方で，授業UD・UDLでは，児童生徒の学習参加は研究の入り口に過ぎず，児童生徒が学力の定着をさせ，活用ができるようになることまで見据えられている。本研究では，音楽科のUDのスタートラインに立つ研究であり，その先の検証までは行っていない。今後，音楽科のUDを実現していくためには，研究手法の習熟にも努めていかなければならない。

引用・参考文献

・荒木美香・阪井恵（2017）「音楽授業のユニバーサルデザインに向けた一つの提案一定時制高校におけるギター導入時の実例として一」『学校音楽教育実践論集』第１巻，日本学校音楽教育実践学会，pp.109-110.

・桂聖・石塚謙二・廣瀬由美子・小貫悟・一般社団法人日本授業UD学会（2020）『教科教育に特別支援教育の視点を取り入れる授業のユニバーサルデザイン Vol.12』東洋館出版社.

・阪井恵（2017）「音楽授業のユニバーサルデザインに向けて ―音楽科の教師・研究者のための基本的な情報―」『明星大学大学院教育学研究科年報』第2号，明星大学大学院教育学研究科，pp.35-47.

・阪井恵（2023）「Universal Design for Learning(UDL)の視点でつくる音楽授業―その可能性と課題―」『明星大学大学院教育学研究科年報』第8号，明星大学大学院教育学研究科，pp.1-13.

・増田謙太郎（2019）『音楽科授業サポートBOOKS 「音楽」のユニバーサルデザイン―授業づくりをチェンジする15のポイント―』明治図書出版.

・文部科学省（2017）『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 音楽編』教育芸術社.

・CAST（2011）*Universal Design for Learning Guidelines version 2.0.* Wakefield, MA: Author，金子晴恵 バーンズ亀山静子訳． https://udlguidelines.cast.org/binaries/content/assets/udlguidelines/udlg-v2-0/udlg-fulltext-v2-0-japanese.pdf (2025年１月８日最終閲覧)